

令和5年度第2回市民活動センター評価委員会 摘録

日 時：令和5年7月11日（火）午後1時30分～午後4時55分

場 所：京都市市民活動総合センター ミーティングルーム

出席者：

（委員、敬称略）中井 歩（京都産業大学法学部教授）＜委員長＞
東郷 寛（近畿大学経営学部准教授）＜副委員長＞
伊豆田千加（特定非営利活動法人子育ては親育て・みのりのもり劇場理事長）
鈴木 ちよ（市民公募委員）
裕井 大治（公認会計士）
森本 純代（一般財団法人藤野家住宅保存会理事）

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

地域コミュニティ活性化

・北部山間振興部長 平井 淳史

市民活動支援課長 小林 寛

市民活動支援係長 別所 隆男

担当 高山 玲子、岩沢 真梨絵

傍聴者：5名

取材者：なし

議 事：・ 令和4年度 いきいき市民活動センター事業の報告
・ 令和4年度 市民活動総合センター事業の報告

開催概要

1 開 会

2 議 事

6つのいきいき市民活動センター（以下「いきセン」という。）及び市民活動総合センター（以下「しみセン」という。）指定管理者が令和4年度に実施した事業についてプレゼンテーションを行い、事前に提出された事業報告書も踏まえ、委員から質疑を行った。

<吉祥院いきいき市民活動センター>

（伊豆田委員）

事業の着実な広がりや深まりを感じた。イベントへの申込みに二次元コードやGoogle フォームを使っているが、デジタルに長けた人材がいるのか。

（吉祥院いきセン）

二次元コード等については、デジタルの得意な人材が新たに入ったのではなく、利用者が便利になるようにと考え、試行錯誤しながら取り組んできたものである。また、SNSについては、日々情報を発信するようにしており、いきセンの様々な活動を知ってもらい、L I

NEの友だちになっていただけるよう努めているところである。

(伊豆田委員)

施設的にこういうものがあれば、もっと利用が広がるのにというようなものはあるのか。

(吉祥院いきセン)

施設に関しては、会議室が2室、料理室1室、和室1室であるが、料理室と和室の利用率が低い。料理室は、用途に制約があるため利用を広げるには難しい部分もあるが、和室は、1階にあるため高齢者の方が使いやすい施設にしたいとは考えている。ただ、畳に直に座るとなると高齢者の方にはしんどい部分もあり、まだどのようにするかは検討中である。

(中井委員長)

和室について、高齢者の利用はどのようなものを想定しているのか。

(吉祥院いきセン)

町内会の会議や地域の老人会の会合に以前は使われており、そのようなものが考えられる。

他には、現在サロンを使っている高齢者向けサークルの方に使っていただければとの思いもある。また、小さな子供さんがいる方にも畳が良いと考えている。ただ、これらの方々を想定した場合、12畳というのは少し狭いというのが悩みどころである。

(森本委員)

南青少年活動センターのオンラインセミナーのパブリックビューイングは面白いと思った。自宅にいて一人で見ると周りにも人を感じながら見ることができる。いきセン以外のイベントでパブリックビューイングを実施する機会を増やすのは良いと思う。実施のきっかけを聞きたい。また、青少年活動センターのイベントのみを取り扱うのか。

(吉祥院いきセン)

今回のパブリックビューイングは、事業で南青少年活動センターと交流する機会があり、話をしていく中で実現したもので、青少年活動センターのイベントのみを考えているわけではない。

(森本委員)

事業のバリエーションが増えていくことは良いことであり、今後に期待したい。

(伊豆田委員)

LINEの友だちの数を教えてほしい。

(吉祥院いきセン)

まだ少ないが45人程度である。登録者からはイベント情報がもらえるのでうれしいとの声をいただいております、もっと増やしていきたいと考えている。

(伊豆田委員)

LINEのメッセージが月200回を超えると有料になるのではないかと。今の人数は丁度良いのかもしれない。

(吉祥院いきセン)

SNSの使い分けとして、イベントを主にLINEで流し、それ以外をFacebookなどで流

すようにしている。

(中井委員長)

ふれあいジャンボリーは、4年計画で自立できるようになっているが状況を教えてほしい。

(吉祥院いきセン)

4年計画で自立できるよう、各団体に少しずつ意識を持ってもらい自分の団体でどこまでの負担ができるかを考えてもらっているところである。

(中井委員長)

上手く自立できるように応援していただきたい。

＜上鳥羽北部いきいき市民活動センター＞

(東郷副委員長)

多様な事業を展開している。利用料金収入について予算の半分程度と少ないが、この点について利用者の属性などの分析はしているか。

(上鳥羽北部いきセン)

そこまでは分析できていない。貸館については、正直甘く見ていた部分がある。コロナ禍においても毎週3～4時間使ってくれていた団体が、令和4年度は利用時間が大幅に減少した例があり、こういったことが非常に大きい。

(東郷副委員長)

例えば交流人口という考え方でいえば、近隣エリアの方にも使ってもらえるよう何らかの仕掛けを作る、又は地域の市民活動団体について調査するもの1つではないか。利用促進のため、もう少し交流人口を視野に入れた展開が必要だと思うがどうか。

(上鳥羽北部いきセン)

交流人口を意識した取組を考えていきたい。

(東郷副委員長)

ぜひとも頑張っていただきたい。

(鈴木委員)

大学生の若い世代のボランティアを取り込み、そこから新しい取組ができているのは素晴らしい。「ふらっとスペース」でセンターを離れて歯科医院の駐車場で開催したきっかけや、いつもと違う場所が会場になったことで生じた効果、また今後、これ以外にも市民への協力を打診していく等の予定はあるか。

(上鳥羽北部いきセン)

歯科医院とのつながりは、newsレター「つなぐ」で、このコーナーに掲載された方のご縁がきっかけである。

場所を変えた効果としては、当該地域周辺に住んでいる方や歯科医院に通っておられる方などが来られ、いつもと違った雰囲気で開催できた。

(鈴木委員)

会場を変えることで、いつもとは違った方が来られ、その方がいきセンを知り、いきセン本体に来るという連携が自然な形で生まれるのではないかと感じた。

(中井委員長)

地元の大学生がサポートメンバーになり、卒業後も取組に参加してくれているとのことだが、現状、サポートメンバーはどのくらいいるのか。

(上鳥羽北部いきセン)

大体 10 名程度で、定例会議を毎月開催している。今年度から事業ごとに分かれて、学生のチームは news レター「つなぐ」の編集に携わっている。また、チラシについても、デザインの勉強をしていた者が手描きで作成しており、これまでとは違ったものになっている。

(中井委員長)

サポートメンバーとして 10 名が活動され、様々な事業の中心になっていることが分かった。この方たちの伝手も通じて利用者が増えれば更に良い。おそらく今後のキーパーソンになってくるのではないかと。

<上鳥羽南部いきいき市民活動センター>

(東郷副委員長)

市民活動に関する様々な講座などを展開している。これまでの評価委員会からの指摘について、地域のニーズや少子高齢化等の課題解決につながるような支援をどのように考えているのか。また、地元団体や社協との接点はあるのか。

(上鳥羽南部いきセン)

まずは様々な方に来ていただくことを考えている。令和 4 年度はセンターなりに情報発信に力を入れた結果、利用者は増加している。多世代の利用を目指しているが、実際は高齢者に偏りがちである点が課題であると考えている。この点に関しては、情報発信のやり方次第では、若い方に見ていただくことも可能なので、発信の仕方を考え利用層を広げていきたい。また、近隣のこども園（保育園）、児童館との連携については、コロナのため中断していた。こども園は、事業の実施時間帯とこどもの午睡時間が重なっており、なかなか実施が難しい面があるが、令和 6 年度には改善が必要と考えている。

(森本委員)

センター主催で毎週多くの事業を展開している。事業が多いからこそ、センター主催から参加者主催への移行を応援していこうと考えていると報告があったが、スケジュール設定やイメージがあればお聞きしたい。

(上鳥羽南部いきセン)

活性化事業については、講師に頼ることなく自ら考え実施する、それをセンターがサポートするというもので、令和 4 年度は相当数の講師を外した。絵手紙の事業でも、まず参加者で話し合い、必要に応じてセンターに相談してもらうなどしている。自分たちで考え、自分たちのやり方でやる中で興味を持ち、非常に熱心に活動されており、令和 3 年度までとは異なり、主体的な活動に広がりが出ていると感じている。

課題としては、各種団体やNPOとの連携までは手が届いておらず、令和5年、6年度での前進が必要と考えている。

(伊豆田委員)

色々あったと思うが、(新たに加わった職員に対し) どうやって事業を育てる等の現状の打破に向けた熱い思いをお聞きしたい。

(上島羽南部いきセン)

市民活動の手助けとなるよう頑張っていきたい。事業数があまりにも多いため、事業を減らし、内容を考えていく必要があるのではないかなと思う。

(中井委員長)

これまでからの指摘のとおり、センターがお膳立てする事業が多くて大変だというのはセンターの趣旨とは異なる。市民活動支援とは、自立的に活動している団体を育成等するための事業であって、いきセン自体が事業をすることが目的ではない。事業をやりたい人や団体を育成することがいきセンの使命である。センター主体からグループ主体へもっと進んでいただかないといけない。カルチャースクールを委託しているのではない。更に言えば、いきセンが用意した講座の中で双方向にするのではなく、センターに対して〇〇を知りたい、やりたいと言って来た方をサポートする、運営を双方向にしてほしいというところである。この点を再度、受け止めていただきたい。

<久世いきいき市民活動センター>

○指定管理者が急遽欠席となったため事務局から報告書の説明を行った。

(伊豆田委員)

以前は頑張っていた Twitter だが、令和5年6月に1回更新され、その前の更新は令和4年3月となっている。状況を聞いておいてほしい。報告書に情報発信をしていると書いてあるので、敢えて問いたい。

報告書についても他のセンターを参考に、もう少し努力の見える内容にしてほしい。

(東郷副委員長)

運営スタッフは悩んでいるのかもしれない。京都市に相談などはなかったのか。

(事務局)

情報発信に関しては一度話をしたことはある。

(東郷副委員長)

報告書についても、京都市からもう一度指導をしてほしい。

(中井委員長)

厳しい環境であり利用が増えないと苦しいというのは分かる。そのあたりはしっかり書いてもらえばよい。その気もないということだと問題で、指定管理を担う能力があるのかという点に触れていかざるを得ない。しっかり京都市からも指導をしてほしい。

＜醍醐いきいき市民活動センター＞

(森本委員)

報告書の人材育成に目がいった。研修を通じてスキルを身に付け、事業で実践しているが、事業の中でこのようなスキルが必要といった想定があってスキルの取得につなげているのか。

(醍醐いきセン)

醍醐では従来から京都市のまちづくりアドバイザーと連携して事業を進めるなどしているが、その事業の中でいきセン職員の意欲が高まり、社内のバックアップも加わって、スキル向上のため研修を受講するに至った。

(鈴木委員)

報告書の中で「だいがゆめプレゼンテーション」が特に気になった。まちの中で市民のやりたい夢をマッチングで応援するというのは、お金をかけずに市民のためになる非常に良い事業であると感じた。また、社会課題を解決するような活動につながり、なおかつ新しく貸館の需要にもつながるというのは、経営的にも良いと思う。これらの取組を考え、始めたきっかけは、まちづくりアドバイザー経由か、それともいきセンで考え、協力者を上手につないでいったのか。次に「だいがゆめプレゼンテーション」は、令和4年度に初めて実施したそうだが、これからも継続的に実施していくのか。

(醍醐いきセン)

だいがゆめプレゼンテーションは、井戸端会議という取組で以前からやっていたが、当時はこんなことをやりたいという多くの声をマンパワーの面から実現できなかった。また、それぞれの思いの実現をいきセンが協力するより、仲間がいた方がすぐに走り出すことができるため、いつかこのような事業がやりたいという思いはあった。実現のきっかけは、醍醐支所との連携事業であり、まちづくりアドバイザーが関わっている。しかし、どこかが主体というより、様々な主体が一体となってできたと感じている。

(鈴木委員)

非常に良い取組であり、これからの期待する。

(中井委員長)

大感謝祭を通じて醍醐いきセンのファンサークルができたとのことだが、メンバーは何名か。

(醍醐いきセン)

20名弱の方に登録いただいているが、実際に来ているのはお仕事の関係もあり10名程度である。醍醐地域にお住まい又は地域で仕事をされている方で、非常に多種多様な集まりとなっている。これまでにいきセン事業に携わっていた方や地元のキーパーソンなどもおられる。その場の話を聞いていても面白い集まりとなっている。

(中井委員長)

これまでの市民活動支援の成果であり、これからも続けてほしい。

(鈴木委員)

ネットワークでいきセンの利用を訴えかけていく手法もあるのではないかな。付加価値の見える化を期待したい。

(伊豆田委員)

インスタグラムのストーリーを見たが、非常に頑張っている。このストーリーでいきセンの付加価値を宣伝する、利用団体の広報を代わりに担うということもできるのではないかな。

<伏見いきいき市民活動センター>

(東郷副委員長)

スタッフの人材育成について、施設運営者としての知識を積み重ねる必要があると思うが、総合教育や研修、勉強会はどのように実施しているか。

(伏見いきセン)

年1～2回だが合同研修という形で実施している。貸館の話もあるが、市民活動センターを運営させていただいていることから、市民活動とは何か、市民活動がどのようなところから生まれるのかといったことについてゲストを呼んで話を聞いたり、それを踏まえてスタッフ同士で日常業務にどのように活かしていくのかという話をしたりしている。

(栢井委員)

収支の人件費の決算額が予算の6割程度である理由を教えてください。

(伏見いきセン)

令和4年度からいきセンの人員配置基準が変わったため、人件費を調整したものである。その調整分を値上がりした光熱水費等に充当したことにより、予算額よりも少なくなった。

(中井委員長)

着実に市民活動を作って育てていると感じた。これらをどのように貸館につなげていくのか、考えがあればお聞きしたい。

(伏見いきセン)

提案業務のサロンの取組ではシニアの方と子育て世代を対象に多世代交流として運用しているが、シニアの活動で3～4年以上活動している団体もある。このような状況の中で新しく活動を始めたいというシニアの方も出てきたため、今後、長くサロンで活動している方は少しずつサロンを卒業して自走していただくことも考えないといけない時期にきている。

サロンで長く活動してきた団体が、少しずつ貸館利用に移行するよう対話をしているところである。

(中井委員長)

伏見いきセンは、高齢者ふれあいサロンをいち早く多世代のサロンとして活用した先駆者である。サロンから貸館への流れについても支援をお願いしたい。

<市民活動総合センター>

(伊豆田委員)

しみセンは評価委員会からの指摘等を踏まえどんどん進化している。一方で、いきセンも

徐々に成長し、今後、しみセンのような役割を担うセンターも出てくるのではないかと思っている。そこで、しみセンには次の進化を遂げることを期待したいが、「総合センター」として、どのような進化をしたいと考えるか。

(しみセン)

いきセンでは、それぞれの地域での相談を受けていると承知しているが、相談事業や講座の開催は、しみセンの基幹業務であると考えている。初歩的な内容の講座を求めている団体もあるため検討が必要だが、より先進的なNPOに合ったレベルの講座を開催するなど、講座の幅を広げていく可能性はある。

また、しみセンでは、NPOだけではなく、一般社団法人や労働者協働組合等、様々な形態の団体を支援の対象としている。しかしながら現状では、一般社団法人や公益財団法人等の詳細に関してはしみセンでの対応が難しく、公益法人協会に相談するよう案内している。簡単なことではないが、しみセンで対応できる範囲をもっと広げ、タイプの違う団体の運営状況に合わせた対応ができるようになればと考えている。

ただし、これらについては京都市の仕様書によるところもある。一方、市民活動の「支援者」を増やしていくことについては、まだ取り組む余地があると考えている。

(中井委員長)

コーディネート事業について、最初は漠然としたニーズや希望を持って相談に来られる場合が多いとのことだが、どのようなルートでしみセンにたどり着かれるのか。各地域におけるコーディネートはいきセンでも実施しているので、地域の方以外が来られるのか。

(しみセン)

他の分野の相談で来られた方や、しみセンの講座を受講されている方など、元々しみセンを知っている方が多い。コーディネートする以上は、しみセンとしてその団体のことをある程度把握しておく必要があり、接点を持たない団体の場合、まずはその団体との関係づくりに時間をかけている。

(鈴木委員)

いきセンや分野別センター等との連携については、評価委員会からの指摘を踏まえて良く取り組まれていると思う。

市縁堂については、従来の1日のイベント型からの転換を試みたとのことだが、これまでの形態でも参加者や寄付はそれなりに集まっていたと思う。なぜスタイルを転換したのか、きっかけを聞きたい。

(しみセン)

第5期指定候補者選定の募集要項に団体の資金調達に関する内容がたくさん入っており、それを考慮したことが理由のひとつである。従来のイベント型では、当日のプレゼンテーションによって寄付を集めていたが、1日限りの支援で終わってしまっていた。そこで、団体と支援者の関係性が構築され、継続的な寄付獲得に繋がるような形態にしていこうと考えた。長期的に見れば団体のためになるし、支援者を育成するという点でも効果的だと思う。

(鈴木委員)

従来よりも支援者との関係性構築に重点を置いたスタイルに転換されていると理解した。
今後もこの方向で進められるとのことで、楽しみにしている。

(東郷副委員長)

職員の入れ替わりは多いと思うが、団体からの相談やコーディネート業務等に対応できる人材をどのように育成しているのか。

(しみセン)

しみセンでは、それぞれ異なる経歴や知識・経験を持った職員が採用されており、例えば「しみセンつながるネット」の運用においては、地域支援の経験を持つ職員が対応したり、新しいスキルを持った職員が採用されれば、そのスキルを研修で共有したりするなどしている。

当初からNPOに詳しい人材ばかりではないが、NPOの認証・認定に関しては、全職員が知識を習得し、どのように相談対応するかをOJTなどで学んでもらっている。若手職員2名は、当初、NPOの設立に関する知識が全くなかったが、しみセンの講座を受講して勉強し、先輩から個別レクチャーを受けたりしていた。少し時間はかかるが、NPO法人の設立と事業年度終了後の手続の相談については、全職員が対応できるようにしている。

(東郷副委員長)

職員を育成するシステムが整えられていると思う。

<その他>

市民活動総合センター及びいきいき市民活動センターの事業報告を聞き終えて、最後に委員の意見をお聞きした。

(森本委員)

いきセンは、地域の人が地域のことを知って関わる機会、交流の場を作るというコミュニティ支援的な要素と、自宅、仕事以外の自分の居場所としてのサードプレイスの要素と、市民活動総合センターのような市民活動支援的な要素という3つの要素を背負っており、少しずつ重なりながら地域によって濃淡があるのではないかと考えている。

各センターがいきセンとしてどのような専門性を持って、社会にどのような働き掛けをすることが必要と思っているかを聞いてみたいと思う。

(中井委員長)

それでは、この件について、全センターに照会をかけることとする。

【各いきセンへの照会内容】

- ・市民活動支援に対する考え方及び姿勢
- ・市民活動を支援することができる人材（職員）育成に関する方針や人材育成に必要な手法

以上